

MJOT 会報

MJOT の益々の発展に向けて

国際交流基金ブダペスト事務所
日本語教育アドバイザー 岩澤 和宏

MJOT は昨年2月の発足以来、わずか1年足らずの期間で強固な基盤を築き上げました。それも初代代表の後藤史与先生、二代目代表のセーカーチ・アンナ先生、役員の先生方を始め会員の方々の「ハンガリーの日本語教育をより良くしよう！」という熱意があったからこそ成し得たのだと思います。国際交流基金ブダペスト事務所としてもできる限りの支援を続けたいと考えています。

私は個人的見解として、MJOT の発展を以下のように捉えてきました。即ち、準備段階を経て正式な発足を「ホップ」、昨年8月の「第14回日本語教育連絡会議」協力を「ステップ」、そして今年9月の「第7回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」共催を「ジャンプ」として更なる発展を遂げるという構想です。9月のシンポを機にMJOT がヨーロッパへ、そして世界へ発信できる教師会となることを期待しています。

ただ、MJOT の本当の正念場は9月のシンポの後だと思っています。ヨーロッパデビューしたMJOT がヨーロッパの課題に発言力を持ち続けられるかどうか。EU 内の日本語教育の課題が、突然自分達の課題になってしまう日もそう遠くなさそうです。

今年9月のシンポジウムを機にヨーロッパ、世界の先生方が「ハンガリーではどう？」と尋ねる姿が目に見えそうです。

お知らせ

2月1日「第10回日本語スピーチコンテスト」第0回実行委員会打合が行われ、第1回から以下の方向で検討していくことになりました。

▼開催時期：2003年2月下旬～3月上旬

▼共催：大使館、JICA/JOCV、基金

尚、教師会は次回実行委員会打合よりオブザーバー参加できることになりました。

第1回実行委員会は3月1日(金)午後4時半

より基金事務所にて行われます。議題は以下の予定です。

- ①審査基準 (予備審査を含む)
- ②参加資格
- ③テーマ
- ④その他

ハンガリー日本語教師会(通称 MJOT)会報第2号
発行日：2002年2月12日
発行者：MJOT (担当：若井誠二)

なお、「MJOT 会報」は国際交流基金ブダペスト事務所の援助により発行されています。

欧州日本語教育シンポジウム・ブダペスト大会実行委員会より

9月6～8日に実施予定のシンポジウム参加募集と発表応募の案内状が先日ようやく完成し、MJOT 会員・欧州日本語教師会会員及び日本語教育関係者に郵送されました。参加申し込み締め切りは5月30日、発表申し込み締め切りは4月20日、共に締切日必着となっておりますので、期日までにお申し込み下さい。

今後実行委員会では日本企業及び日本語教育関係機関に資金面のご協力をいただけるよう交渉に歩きます。またこれと並行してシンポジウム成功に向けて定期的に実行委員会を開きプログラム運営の詳細を決定していきます。大会間近になりましたら MJOT 会員の皆様にもご協力をお願いすることになるかと思いますが、その時はよろしくお願い致します。

実行委員長 セーカチ・アンナ

君はどう思う？

日本語教育界でも「教師養成ではなく教師成長！」という時代になってきています。自己を成長させるためには、まず己の姿を客観的に捉えることが必要ですが、そう言われてみても何をどうすればよいのやら…

アクション・リサーチなどの考え方では「授業に関して気になるところが出た時、それが己の姿を客観的にそして批判的に見るチャンスである」と言うことになりそうですが、ここではハンガリーで出版されている「チョークからビデオまで」という外国語教授法の入門書のQ&Aを読み、そこで自分自身が感じたことを「教師としての己の姿を客観的に見る」チャンスにしようと思います。さあ、あなたはどう思いますか？

Q：新しい方法で教えようと思うんですけど、どうやら学習者たちはそのやり方が嫌みたいなんです。

A：学習者を無視して、いきなり新しい教え方を導入しようとしても、なかなかそれは受け入れられません。ですから、まずは学生の「学習に

対する確信」を替える努力をし、その後で新しい教授法を導入するべきだと思います。「まずは学習者のいるところからスタートする。」これが基本です。

Q：すべてを学習者に任せるなんて、学習者は私が何も知らない、できない先生だと思ってしまいます。

学習者中心の語学学習の実現とは、学習者の自律・自主性を大切にすることです。自立的学習を成立させるためには学習者のニーズをつかむこと（ニーズ分析）が重要です。ただ、これは口で言うほど簡単なことではありませんし、最初のうちこれがうまくいかなくても、そんなに気にしないでください。何回か試しているうちに、どのぐらいまで学習者にまかせればよいか分かり、努力が報われるでしょう。

Q：クラスみんなの目標が違う場合、妥協点が見つかるものなのでしょうか。

とても難しいですが、学習者同士で話し合いを重ねあわせればきっと何らかの解決策が見つかるでしょう。また、この際学習者間で目標言語を使って話し合えば、それ自体がタスク活動として有意義なものとなるはずです。

(„A KRÉTÁTÓL A VIDEÓIG” 19 ページより。なお、訳は正確でないところもあるかもしれません。若井)

卒業試験を 考える会

11月21日、第3回卒業試験を考える会が国際交流基金ブダペスト事務所で開催されました。

今回はまず、各校からのアンケート集計結果(下表参照)をもとに、現在の各校の現状についての情報交換を行いました。同じ中等教育機関といっても、日本語教育の位置づけ(必修・選択必修・自由選択など)、学習人数など非常に多様化しており、「ハンガリーの中教育機関における日本語教育」を考える場合、この多様性を無視することができないということを再確認させられました。

次に、卒業試験準備および実施に際し前回でも問題としてあげられた辞書の不足という点について再度意見交換が行われました。この中で「学習者の手作り語彙リストは試験には持ち込めないが、市販のものは持ち込める。では、教師会で語彙リストを作成し、それを学習者に販

売するのはどうか。こうすれば辞書の有無における学習者間の混乱も少なくできるし、問題作成の際にもこれを参考にすることができる。」という意見が出され以下のような決定がなされました。

コンセプト

- ▼それぞれの教員が独自に持っている日本語—ハンガリー語の語いリストを集めて一冊の語いリスト(約2000~3000語)を作る。
- ▼基本となる教科書は日本語初歩、みんなの日本語、日本語能力試験4・3級語彙リスト
- ▼例などは特におかず、卒業試験のために必要な意味だけをのせるようにする。

タイムスケジュール

- 第一段階 → 語彙リスト収集(1月末まで)
50音順に並べかえる(伊東担当)
各教員がチェック
- 第二段階 → ハンガリー語訳付(2月末まで)
パソコン入力
- 第三段階 → 校閲(3月半ばまで)
- 第四段階 → 印刷(50部)(3月後半)

私たちの努力が実を結ばばよいのですが…

(伊東隆作)

参考) 2001年度の高校における学習者数と卒業試験受験予定者数

高校名/学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	卒業試験受験予定者数	合計
Babits Mihály	/	/	/	/	/	/	/	/	4	10	12	8	8	34
Bálint Márton	/	/	1	10	4	4	2	3	3	1	2	0	0	30
Diósgyőri	/	/	/	/	/	/	/	13	5	3	5	3	0	29
Géza Kiraly	/	/	/	/	/	/	/	/	9	7	6	6	0	28
Hunfalvy János	/	/	/	/	/	/	/	/	11	7	11	8	8	37
Szent Margit	/	/	/	/	/	/	/	/	1	20	0	0	0	21
Táncsics Mihály	/	/	/	/	/	/	/	/	8	3	5	2	0	18
Terézvárosi	/	/	/	/	/	/	/	/	15	11	10	2	0	38
12 カラット高校	/	/	/	/	/	/	/	/	7	0	4	7	0	18
Városmajor	/	/	/	/	/	/	/	/	10	0	4	9	9	23
合計			1	10	4	4	2	16	66	62	55	38	25	286

※ この他に高校で日本語を学習していない学生も受験する可能性がある。(集計:伊東)

日本語教師に必要な カウンセリング技術

—その1—

小松慶子 (こまつよしこ)
元千葉県流山市教育委員会カウ

人間はだれでも自分の話を聴いてくれる人を求めています。聴いてくれる人には親しみを感じ近づいてきます。自分のいうことに耳を貸してくれない人にとりかこまれているほどいらだたく寂しいことはありません。自分の話に耳を傾けてもらっていても、軽率に批判されたり指図されたりすると「わかってもらえない」と感じ、「とやかくいわないで、ちゃんと聴いてくださいよ。」と言いたくなります。また、話すことがらを理解してもらっても満足できない。話すことがらでなく話している自分の気持ち、感情をそっくりそのまま受け止めてほしいのです。

進学競争の中で今の子どもたちは心身の苦痛は大人の想像をこえています。「学校をやめたい」「生きているのがいやになった」「私はもうダメだ」とシグナルをいっぱい発しています。

小学校四年の孫とおばあちゃんの会話があります。

「おばあちゃん、極楽ってほんとうにあるの。」
「ほんとにあるよ。」
「極楽ってほんとうに楽しいところ？」
「楽しい楽しい。苦しいことって何もないところよ。」
「そしたら、おばあちゃんテストもないの」
「ない、ない」
「そしたら、ぼく早く極楽へ行きたいなあ」

たとえ自殺に追い込まれるほどにいたらない

にしても、例えばこのようなさりげない日常会話の中で、子どもたちは心身の苦痛を訴えていることがわかります。

登校時間が近づくと吐き気を催し、狂ったように母親に暴力を振るった不登校の中学生の治療にあたった保護観察官は次のように書いています。

ようやく「学校に行きたい」と言い出したA君を伴ってある中学校を訪れたのは、担当して半年ほどたっていたらうか。出迎えた先生は「ああそう。後ろの方に席が空いているから掛けていなさい。」と言っただけであった。

その後、数日間、本人を連れて登校してみた。しかし二週間ともたずA君はもとの状態に戻ってしまい、以後学校へ行きたいとは言わなかった。一ヶ月ほどして百キロ近くのスPEEDでオートバイを無免許運転し、対向車に正面衝突して死亡した。

(『朝日新聞』「論壇」)

学校休み、あれはじめてから半年後、ふたたび学校にもどるまでのA君の葛藤、自己成長をめざしての心的エネルギーはたいへんなものだったと思います。先生がそんなところをしっかりと感じとり、受け止めた対応をしてくれたらと思わずにはられません。

不登校、拒食過食症、夜尿、吃音、自虐行為などは、成長力の建設的な発現が阻止されたことからおこる心理的な不満や不安が根にあります。その根にふれるようなカウンセリングによって、人格的成長が促進されれば、それにとともなって問題行動が消失することはあります。けれども夜尿、不登校などをひきおこしている心的欲求を無視して、一方的に夜尿をやめさせたり、登校させたりしようとするほど、かえって自閉や暴力などの症状をあらたにひきおそしてしまいかねません。安易な問題解決のための発言が、人の命をうばうことさえあるのです。

(続く)